



TITLE:

# 近代音楽における芸術至上主義の形成 --ベートーヴェンを中心とした社会学的研究--( Digest\_要約 )

AUTHOR(S):

川本, 彩花

---

CITATION:

川本, 彩花. 近代音楽における芸術至上主義の形成 --ベートーヴェンを中心とした社会学的研究--. 京都大学, 2014, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2014-09-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18600>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要旨は2014/10/01に公開

## 【博士学位論文の要約（要約公表用）】

### 近代音楽における芸術至上主義の形成 ——ベートーヴェンを中心とした社会学的研究——

川本 彩花

本稿の目的は、芸術至上主義はいかにして 19 世紀西欧社会において形成され出現したのかについて、音楽に焦点を当てて、当時進展しつつあった商品経済およびメディアの視点から検証することである。芸術至上主義とは、ここでは、「芸術はそれ自体を目的に自律して存在する閉じたシステムであるとみなす芸術崇拜の立場」と定義しておく。

事例として取り上げたのは、ドイツの音楽家ベートーヴェン (Ludwig van Beethoven 1770～1827 年) であり、資料として用いたのは、その伝記と書簡、および 19 世紀ドイツの音楽雑誌におけるベートーヴェン批評である。なぜなら、音楽史研究において、芸術至上主義を準拠点とする音楽活動はベートーヴェンに始まったと解されている。そのため、ベートーヴェンを事例に取り上げることによって、近代において音楽が芸術至上主義化してゆくメカニズムを、その端緒にまでさかのぼって解き明かすことができると考えられるからである。また、その際、J. ハーバーマスの文化的合理化論を理論枠組みとして援用し、分析と考察を進めた。

本稿は、序章と終章を含む全 7 章から構成され、それぞれ各章で明らかになった点は次のとおりである。

まず第 1 章では、先行研究の再検討として、芸術・音楽社会学、および文化社会学の重要な一分野である文化的再生産論の研究動向について論じ、芸術至上主義の制度化のメカニズムを解明する本稿の位置づけを明らかにした。まず、芸術・音楽社会学の研究動向について検討し明らかになったのは、①芸術・音楽社会学は、作品分析から制度・組織・価値論へと研究の射程を拡大し、そのなかで芸術・音楽の「自律性」や「超越性」概念そのものを分析する新たな視点を獲得してきたこと、②しかし一方で、これまでの研究では、そうした自律性の表象の形成プロセス・メカニズムについては十分に明らかにされていないこと、である。そこで本稿は、この残された課題の一端に取り組むものとして位置づけた。次に、芸術・音楽社会学の先行研究に加えて、これまで趣味と社会階層との関係を論

じてきた文化的再生産論の研究動向についても検討した。そして、文化的再生産論が、正統文化（ハイカルチャー）／大衆文化という文化の序列性・階層性を自明のものとして議論を展開するのに対し、本稿は、そうした文化の序列性・階層性が暗黙のうちに依拠する「芸術」という表象の出現・形成について、知識社会学的に問いなおすものであると位置づけた。

第2章では、具体的な事例分析に先立ち、本稿で理論枠組みとして援用するハーバーマスの文化的合理化論について説明した。そして、商品経済（市場）とメディア（批評）の2つの視角に着目する本稿の視点・着眼点を明らかにした。さらには、文化的合理化論のより大きな理論的背景として、M. ウェーバーの西洋合理主義論と、ハーバーマスによるウェーバー批判、およびコミュニケーション的行為論を概観した。そして明らかになったのは、ハーバーマスがその文化的合理化論のなかで、（音楽を含む）芸術領域の自律化の社会的条件として市場（商品経済）と批評（メディア）に着目していた背景には、彼の包括的な社会理論としてのコミュニケーション的行為論における、システム／生活世界という2層の社会概念が対応していることである。

第3章では、本稿で事例として取り上げるベートーヴェンについて論じた。まずは、広く中世から現代に至るまでの西洋の音楽と社会の歴史を概観し、西洋音楽史におけるベートーヴェンの位置づけについて検討した。その結果明らかになったのは、次の2点である。すなわち、①彼以前の音楽家が宮廷貴族によるパトロン制の時代に生きたのに対し、古典派から初期ロマン派の時代に生きたベートーヴェンは、まさにそれが崩壊し始める大転換期に生きた人物であったこと、②こうしたベートーヴェンのあり方に、ハーバーマスが指摘していたように、市民的・資本主義的な芸術市場によって媒介されながら自律化への階段を上がる音楽（家）の姿が読み取れること、である。これらの点に関しては、ベートーヴェンに焦点を当てて、ボン時代からウィーン時代に至るまでの彼の生涯と当時の社会状況について論じるなかで、さらに詳しく確認された。

以上をふまえて第4章から、芸術至上主義の出現・形成に関する分析と考察を進めた。まず第4章では、伝記と書簡を資料として用いてベートーヴェンの生涯と言説（ベートーヴェン自身の言説）を分析し、芸術至上主義が近代西欧社会において形成された具体的諸相を、商品経済の視点から検討した。その結果明らかになったのは、「芸術」とは一見相反する商品経済の流れが、「芸術性」の発見によって大きな役割を果たしたという、「芸術」と経済の相互補完的關係である。すなわち音楽は、宮廷貴族社会から市民社会への社会構

造の移行を背景に、従来のパトロン制から解放され自律したことの代償として、商品性を帯びてきた。ところが音楽は、このように商品経済と結びつき商品化されたことで、むしろ相対的に貨幣には還元されえないものとしての「芸術性」が新たに発見され、芸術至上主義が主張されるようになったのである。

次に第5章では、当時の音楽雑誌を手がかりにベートーヴェン批評の内容（批評メディアの言説）を分析し、芸術至上主義が近代西欧社会において形成された具体的諸相を、メディアの視点から検討した。その結果明らかになったのは、本来的には音楽（家）と社会とのあいだをつなぐメディアが、かえって両者の隔たりをよびさましたという逆説的なダイナミズムである。すなわち音楽雑誌は、前述のようなパトロン制の崩壊も背景に、音楽が商品化され広く（ブルジョワ）市民へと開放されたときに、音楽と社会をつなぐ媒介者として登場した。ところが音楽雑誌は、こうした媒介者の役割を遂行するなかで、むしろ両者（音楽と社会）の距離を表明し、音楽を価値づけ芸術至上主義化していったのである。さらに第5章では、第4章の分析・考察結果と併せて、近代音楽における芸術至上主義の形成とは、商品経済の視点からもメディアの視点からも、逆説を伴う現象であったことが明らかになったと総括した。

終章では、芸術至上主義の出現・形成に関する前章までの分析・考察結果と、本稿で理論枠組みとして援用してきたハーバーマスの文化的合理化論とをつき合わせつつ理論的考察を行ない、文化的合理化論に対する批判的再検討を試みた。第2章で明らかにされたように、ハーバーマスは、その文化的合理化論における「市場」と「批評」という2つの視角を、彼のコミュニケーション的行為論におけるシステム／生活世界という2層の社会概念から導き出していた。これに対して、本稿において、ベートーヴェンという具体的な事例をもとに実証研究を行なった結果新たにみえてきた知見として、市場と批評の相互浸透的なリアルな姿と、システムと生活世界との戦略的な相互補完関係を指摘し、まさにこの点に、文化的合理化論を批判的に再検討し乗り越えることのできるひとつの契機があると結論づけた。